

第二部門 〈次代を担う子どもの育成に関する論文または実践記録〉 入選論文

「子育て支援は親支援」という視点

―電話相談での十年余の実践を通して―

羽 田 里加子



羽 田 里加子 さん

〔略 歴〕

年 齢 70歳
住 所 東京都多摩市在住
経 歴 昭和36年～平成7年 東京都庁に勤務
昭和40年 早稲田大学第2文学部卒業
平成7年から不登校児の親支援を経てカウンセリングを学ぶ
現在は子育て支援電話相談の相談員（ボランティア）

〔応募動機及びコメント〕

思いがけず入選のお知らせを頂いて、現実とは思えずしばし思考停止状態に陥りました。

10年余り子育てをするお母さんの話を聴いてきて、現在の子どもが育つ環境が容易ならぬものになっているという危機感を、強く持つようになりました。その危機感を少しでも多くの人々と共有し、好ましい子育て環境にしていくにはどうしたらいいのか、本気で考えていかなければならないという強い気持ちで、この論文を書く動機になったと思います。

子どもは母親（母なるもの）が好きです。見ているこちらが切なくなるほどに、母なる存在を求めます。その子どもの心を大切に、これからも子育て支援（親支援）の活動を続けていこうと思っています。

この受賞は私のその思いをご理解下さって、エールを送って頂いたと受け止めています。

本当に有難く、心から感謝申し上げます。

〔梗概〕

全体を三段に分けて、子育て支援が親支援であることの意味と、そのための電話相談が、今の社会にかなりの有用性を持つことを、自分の体験を軸にして述べた。

(一) 無条件の親支援の意味

ここでは、子どもが様々な困りごとを引き起こし、やっかいな存在になるのは、成育環境が大きく影響するということを、改めて確認した。そこで最も重要なのは、わが子を受け止める親の有り様だと強調する視点を、自分自身の体験を交えて述べた。そして、子どもとの関係を回復していく過程で、自助グループでの母親支援を受けられたことが如何に有効だったか、体験的事実を踏まえて明らかにした。

(二) 相談の場で感じる現在の子育て事情

現在の子育てを巡る様々な状況を、主に心の危機的側面から捉えようとした。子どもをかわいく思えないなど、母と子の心理的結びつきが弱まっている状況に強い危機感を持ち、それがどこからきているのかを考察した。その際、戦後の社会状況の変化のなかで、核家族化や少子化が子育ての様相を激変させた要因として重く捉えた。また近年特に目立ってきた現象として、精神を病む母親の増加や発達障害の問題などにも触れた。

(三) 電話相談の有用性

まとめの章として、電話相談が今の社会のニーズに応え得る相談として、草の根的なところで大きな意味のある存在になることを明確に述べた。面接のカウンセリングをアナログ的とすれば、電話相談はデジタルな世界に足を踏み入れたとの見方もでき、その点でも今の社会にマッチしているといえるのではないか。面接相談のハードルの高さと比較し、身近で手軽な電話相談が社会に広く受け容れられる要素を考察した。

(一) 無条件の親支援の意味

子育て支援は実は親支援であるとは、実際に子育て支援に携わっている人たちの実感的な共通認識になっている。恵泉女学院大学教授で発達心理学の分野から、家族・親子関係を専門とする大日向雅美氏は『子育て支援が親をダメにする』なんて言わせない』(二〇〇五・岩波書店)という著書に、「子育て支援は親育て、親育ち支援でもある」と書かれている。この本は大日向氏ご自身がスタートから関わった、港区の子育て広場『あい・ぼーと』の実践についての記録といった内容だが、まさにその理念に基づいた子育て中の親(主として母親になるが)の支援を実現されている。

思えば昔から「子どもは親の背中を見て育つ」とか、「親が変われば子どもも変わる」など、親は子どもにも重大な影響を与える存在と認識されてきた。私自身もまた子育ての或る時期に「親が変われば子どもも変わる」というのはこういうことか、と否応なく実感させられた体験をしている。

それは息子が中学入学とともに始まった数年間の母と子の葛藤の時期にあった。彼は中学に入って突然浮き足だつように暴走し、学校内で問題行動が頻発した。それは学年が進んでも一向に収まらずエスカレートするばかりで、高校進学も覚束無いという事態になってしまった。その時母親としての私が陥った心境は、この子の未来が失われてしまうという不安一色の世界だった。それまで息子の将来について、高校は勿論大学進学までも視野に入れた人生設計を、ごく当たり前として考えていた親だった。高校へも行かれないなどと、想像したこともなかった。

そうした私の世界を根こそぎ覆されようとしている。その衝撃と不安、情無いという思いと同時に、こうなったのは母親の私にも原因があったのではないか、という思いが生じてくる。当然周囲の目も非難がましい

もの感じられて、出口のない苦しさに追い詰められる日々を過ごした。そんな中、息子は学校などまるで意に介さない風で、昼夜逆転の生活になり、同じような仲間と群れて遊びまわる毎日を送っていた。後になって、彼の心中もまた不安・苛立ち・怒りなど、様々なもので波立っていたのだと分かってきたが、当時の私はそんな彼の心のうちなど推し測る余裕はなく、何故？何故？という問いかけばかりが胸の中を駆け巡っていた。

あの時の息子に周囲の大人たちの言葉は一切通じなかった。無論親も例外ではあり得ず、私はこの時ほど世の常識とされる言葉が何の力も持っていないと思わされたことはない。

やがて私は「学校不適応児の父母の学級」という、埼玉大学の茂木俊夫教授（教育心理学専攻）が主催している自助グループに救いを求め、自分の苦しさを充分に聞いてもらい、と同時にそのグループに参加した同じ悩みを持つ母親たちと、子どもの発達に伴う様々なことを学習し始めた。思春期がどういう時期なのか、それがその子の人生にどんな意味を持つのか、学校へ行く行かないが果たしてそれほど重要なことなのかなど、多くのことをそこで改めて考えさせられた。

回を重ねる毎に私の気持ちは落ち着き、息子との関係が客観性を持って見られるようになっていった。そして息子も今必死に自分の生き方を模索している時期なのだと思えば、その荒れようが異常事態などではなく、大人になっていくひとつの通過点だと受け止めることができたのである。

息子の人生は彼のもの、母親としての私はその心情を理解し、見守るだけが彼にやってあげられることなのだと思え、心から納得したとき、何かから抜け出たように楽になり、目が覚めたかと思われるほど周囲の光景が鮮やかに見えたものである。

私の内側に起きた何ごとかの変化を、息子は敏感に感じ取ったのだら

う。母と子の関係は、目に見えて穏やかになっていった。それまでの反抗的な態度が減ってきて、彼なりにこれからどうしていかを、前向きに考えている様子が見え始めた。私も表面的にはあまり変わらない息子の姿を目にしても、心が波立たなくなっている自分に気づき、これまでのあの苦しきは何だったのだろうと、不思議な気持ちになったものだ。思えば自助グループに参加し、その援助を得られたことが、私を出口のない苦悩のモノローグから救い出してくれる大きな要因となった。日常の苦しきに心がみくちやになっっている状態をありのままにさらけ出し、それをじっくりと聞いてもらえたのは、私には何よりの力になったと実感している。それもただ聞いてもらった、というのではなかった。

そこではどんな本音を吐こうと非難されることはなく、そういうこちらの気持ちを分かり、肯定的に受け止めるという姿勢が常にあった。母親（勿論私も）たちは安心して、自分の気持ちを訴えることができたのだ。

こうした体験を積み重ねたことで、私は親であり子どもであっても、それぞれ別の人格なのだという客観性を、本当の意味で獲得できたと思っている。その時から息子もまた、自分自身の人生に気づき始めたと思う。

このことから親の有り様がこんなにも深く子どもに影響しているのだと、私は肌身に沁みて感じ取ったといえる。子どもが様々な問題行動を引き起こすとき、親との関係にどこか満たされないものを抱えていることが多い。気持ち同士がスムーズに通わなくなると、些細なすれ違いが重なってくると、お互いに不信感を抱き、とげとげしいやり取りばかりになる。

それは時には、家庭内暴力にまでエスカレートしてしまう。日常生活が修羅場と化し、親は子どもの心が全く掴めず、戸惑い、苛立ち、そして最終的には自分で自分を責めるようになっていく。特に母親は子どもに対する自分の影響力が絶大だと思っっているために、自分で自分を免責することができない。

周囲の空気も親、特に母親に対して冷やかであることが多く、四面楚歌という状況が生まれ易い。このように内側からも外部からも追い詰められて、母親は出口のない世界に悩みを抱えたまま、居続けなければならぬ。

そのストレスが子どもに向かい、親子関係は日に日に悪化するという、悪循環を生むことになるのである。

先にも少し触れたが、母親自身に自分を責める気持ちが生じてくると、また別の危機的状況が生まれてくる場合がある。その思いに追い詰められた挙句、精神的病理を引き起こす母親も稀とはいえないのだ。その場合、長期間に渡る対処が必要となり、当人は勿論、家族、特に子どもにとって、その深刻さは相当なものといわねばならない。

そうしたどうにもならない状況のなかにいる母親に、寄り添う存在が絶対に必要だと、私は自分の自助グループでの体験を通して、また、十余年の子育て支援の電話相談で聞いた母親たちの訴えを通して、確信するようになったのである。

私が携わった電話相談は、子育てのノウハウについての相談がメインではない。勿論そういった内容にも対応するが、前述したように子育て中の母親の気持ちに寄り添う心理相談をコンセプトとするものだ。

子育てそのものの悩みやノウハウを具体的に聞きたいのであれば、保健所や家庭支援センター、民間でも専門家が応じる相談機関はかなり用意されている。そのような具体的な事柄に特化した相談や支援ではなく、母親のストレスからくるモヤモヤとわだかまる気持ちを、ただただ聴くという電話相談はあまりないといってもいいように思う。

電話してくるお母さんたちが、「こういう話をしても聞いてもらえないので・・・」とすることが多いのは、子育てに直接関係ない話として流され、親身に聴く気で聴いてもらえない現実があるからだろうと推測している。

母親自身にすらはっきりしないモノログ風な話を、じっくりと心ゆくまで聴いてくれるところは滅多にない。しかし今、母親たちの多くが求めているものは、日常どこにも吐き出せない自分の本音を丁寧に聴いてくれる相手である。それは子育て中の母親の隠れたニーズという風にも捉えられるのではないだろうか。

だからこそ、そういう母親の気持ちに寄り添い、無条件に受け容れてもらえるという安心感を持ってもらうことを、何より大切にするとところとして存在する電話相談は、大きな意味を持つと考えている。

ひっそりと、しかし母親たちのいつも傍らにいる味方として認知されること。今私が熱い思いで子育て支援（＝親支援）の相談員として、取り組む理由がそこにある。

（二）相談の場で感じる現在の子育て事情

テレビ、新聞などでは毎日のようにといってもいいくらい、児童虐待や家庭内暴力、少年犯罪、非行などの反社会的行為といった、つらい気持ちにさせられるニュースが報道されている。母親からの相談の内容にも子育てへの基本的な姿勢、考え方に不安を覚えるものが少なからずある。

なかでもかなり深刻な事態だと思うのは、子どもを愛せない、かわいいと思えないと訴える母親があまり珍しくなくなったと思われることだ。乳幼児の我が子を異次元の生きもののように感じ、どう扱っていいかわからない。このままだと虐待してしまうのではないか、いやもうすでに私は虐待しているのかもしれない。こういった不安に人知れず悩む母親が想像以上に多くいるのだと、相談を受けていくなかで段々に分かってきた。

不安を持って相談してくる母親には、第三者が支援の手を差し伸べやすくなり、深刻な事態に陥るのを防ぐことができる。が、全く自覚がないまま、或いは外部に訴える術がないまま子どもを育てる日々を過ごしている母親が、この社会のそこにいるのではないか。子育て支援の電話相談に携わるようになって、私のなかにはそうした危惧が以前にも増して膨らみ続けている。

こうした状況が生まれる背景は色々に言われているが、まずは時代による社会の変化を見ないわけにはいかないだろう。子どもが育つ環境は、戦後かなりのスピードで変わり続けている。そのなかで子育てに大きな影響を及ぼしたのは、家族の形態が大きく変わって核家族化したことと、それに伴う少子化の現象が進んだことではないかと思う。

両親と子ども二人という平均的核家族の有り様は、祖父母やほかの親族同居などのわずらわしさから解放された反面、日常生活のなかで多様な人々と関わる体験を私たちから奪ったといえる。そのことは家族間に育まれる人間関係を稀薄にし、子どもの育ちに大きく影響していったと考えられる。

それと並んで、社会的には人間関係を大きく様変わりさせる状況が生まれていた。言うまでもなく、IT機器の出現である。パソコン、携帯電話はアツという間に普及し、社会に浸透していった。

人間関係の持ち方はそれによって大きく変わり、直接顔を突き合わせなくても済むコミュニケーションが、今や主流になった感すらある。そのこともまた、人間関係を稀薄化していく抗いような流れを生んだ。そんななかで、高学歴、高収入、社会的ステータスの高い地位が最も価値あるものとされ、勝ち組、負け組などと区分けされて、息苦しさや喘ぐ人たちが社会に充満しているように感じられる。

親たちは、この社会を有利に生きられるように、子どもをいい学校に入れて、一流企業に就職させることを目標とするようになった。それは

ともすれば、親の価値観に沿ういい子であることを強要する権力的な支配に限りなく近いものになった。そうした一元化された価値観を強固に持つ親に支配され、その要求に応えようと必死で頑張らされた子どもたちが、親になって子育てをしている時代に入ってきた。現代の子育て事情を見ると、そこを考えずに実情を捉えることはできない。

それ故に、今子育て中の母親一人ひとりが、どのように育てられこれまでを生きてきたのか、その点にも思いを馳せる必要がある。

その思いを強くしたのは、子どもを愛せないと訴える母親が、自分の母親から十分な愛情を与えられなかったという思いを、吐露する場合がしばしばあるからである。その成育歴を聞いていくと、現在なら虐待と言われ兼ねない状況が窺える場合もかなりあるのだ。そうした場合、彼女たちが自分の子どもをかわいがるにはどうしたらいいのか戸惑い、不安でいっぱいになるのは、無理もないことと理解できるのである。

相談員として、相談者の子どもが愛せないという悩みを聴いたとき、その理解がないと心からそう訴える相手の気持ちを受け止めるのは難しい。心から受け止めるには相談員に、相手の話の内容から適確な情報をキャッチして、洞察し理解する能力、或いは感性が求められる。世の常識や道徳観、価値観などを前提としない別の視点から人間を見つめる、いわば心の視座といったものが必要になってくると思われる。その視点を得て初めて、相談者の心の奥底にある真の悩みに寄り添う手がかりが、掴めるように思うのである。

十年余り多くの相談者と語り合ってきた、母と子の間で起きる問題は、その根っこに母親自身の存在の危うさがあるように感じることが多い。子どもを愛せないと悩む母親自身の母との愛着関係の有り様が深くかかわっていると、かなりの確信を持って言えるように思われる。

イギリスの児童精神科医であるウイニコットは「乳幼児期の子どもは『原初的母性的没頭』を必要としている」と述べている。

実を言うと、私がこの言葉を知ったのは、子育てに関する考え方に大きな影響を受け、深く共感した社会評論家の芹沢俊介氏の著書『子どものための親子論』二〇一三・明石書房)によってであった。言葉から受ける感じは学問的で耳慣れないものだったが、その意味するところは、不思議とすんなり心の内側に入ってきた。子育て体験者として、或いは子育て体験者として、実感的に分かるという気がしたのである。

芹沢氏はウイニコットがこの概念を次のように定義したと解説している。

「原初的母性的没頭は、母子関係の最早期における、母親の非常に特別な状態であり、その実質は、ほかの一切に無関心になって、子どものニード(絶対の必要性)に関心を集中させ、子どものニードにのみ感受性を開き、鋭敏化させていくこと」つまり「生まれてくる我が子に、ひたすら夢中になること、かまけることである」

ウイニコットはこの母子関係があつて、子どもは自分自身が確かにここに在ると確信することができるというのだ。

だとすれば、子どもを愛せない母親が増えていると感じる現代は、基本的な存在の危うさを抱える子どもたちが、増えていく社会なのではないか。やがてはその子どもたちが、子育てをする大人になっていくと考えると、これからの社会にどう影響していくか、大きな不安材料のように私には感じられる。

このように私も、母親との愛着関係が子どもの育つ環境に必要欠くべからざるもの、という認識をかなり前から強く持っていた。というのは、我が子の問題に悩むずっと以前から、少年犯罪について通り一遍でない関心を持って、出版される関連の本を片っ端から読んでいたことがあるからだと思う。

大きな話題となり社会的関心を引いた少年事件は、ルポルタージュやノンフィクション、または社会評論などでほとんど書物に著されている。

それらには事件を起こした少年の家族関係、特に母子関係などの成育歴が詳細に述べられていることが多い。それを辿っていくと、その根底にあるものが、かなり共通していることが見えてくる。芹沢氏は「親殺しの前には、まず子殺しがある」(『親殺し』二〇〇八・N T T出版)と鋭い指摘をしている。

つまり、彼らが生れ落ちてからの成育環境がどのようなものであったか。一言で言ってしまうえば、皆それぞれに家庭の状況が不安定で、自分という存在を大事にされた感覚がない。自分の気持ち、自分の意思、或いは自分の生理までが無視され、否定され、そのために生じている苦しさを、最も味方である筈の母親にも誰にも、理解されずにいた子ども時代であったという点で、奇妙なほど似通っている。芹沢氏はそれを子殺しと表現されたのだと思う。

親という大人は、子どもにとって圧倒的な強さを持つ存在である。その強い存在に支配され、分かってくれる人もなく、感情を発散させる術もないまま、抑え込まれた怒り、恨みなどのエネルギーが溜まり溜まって爆発したとき、私たち大人には想像もつかない事件となって、社会に立ち現われてくるのだと私は考えるようになった。そして、これらの事件は、特殊な世界で特殊な人たちが起こす出来事ではないことを、身に迫る危機感を持って受け止めている。

極端にいうと、子どもに没頭できない親が増えている社会、「子どもより自分」という風潮が主流の社会の有り様は、情緒的に満たされない不安の強い子どもが増えていくということの意味するのではないか。それは先にも触れたように、「基本的な存在の危うさを抱えた人々」を増加させることにつながっていくように思われるのである。

私自身の子どもの頃を思い返してみると、母は自分の時間のほとんどを家族、殊に子どものために費やしていた。彼女にとって我が子は何ものにも優先する絶対的存在としてあるのだと、私は幼心に疑いようもな

く感じ取っていた。まぎれもなく私は「原初的母性的没頭」の中で育てられたのだ。昭和が高度経済成長期に入る頃までだと思うが、あの頃の母親たちは程度の差こそあれ、そうした母性の匂いを持っていたような気がする。

だが今の私には、自分の母ほど子どもに没頭していなかったという、はっきりとした自覚がある。そして「子どもより先に自分」という風潮に親和的な自分に気づいている。

そのせいか、私は自分の子育てになんとはない後ろめたさをずっと感じてきていた。

私の子育てに対する危機感は、そうした自分の本音を感じるところからも、生じていると認めざるを得ない。

しかし一方で、そんな今風の母親の要素がある私も息子の問題で苦しみ、ギリギリのところまで追いつめられて、強固に思い込んでいた価値観を見直し、それまでとは全く違う視点で子どもを見ることができるようになった。そのとき、親として私は初めて本当に子どもを抱き止めることができたという気がする。遅ればせながら、本気で子どもの「ニード」を優先する、本当の親になれたという感覚があった。それからの私は、心の片隅に張り付いていた自分の子育てに対する後ろめたさが、少し薄らいだ気がした。

私がこの段階に辿り着いたのは(一)のところで詳述したように「学校不適応児の父母の学級」という自助グループの支援があったからである。傍らに寄り添う支援者がいれば、それはグループでも友人でも相談員でも、それを抛り所として、母親は心を楽に持って子どもとの関係をよりよいものにしていくことができる。母と子の愛着関係が育まれるのに大切なものは、まず母親が楽な気持ちで安定していられる状態である。先にも書いたが、母親自身の成育歴を聴いていくと、虐待といわれ兼ねない状況がかなりある。こうした子ども時代を経てきている母親たち

は、安定という状態からは程遠いところにいる。彼女たちは積み残した課題を抱え、育ち切らない自分の内なる子ども(インナーチャイルドといわれている)を抱えて、母になり切れない苦しみのなかにいるのである。そしてそれは多くの場合、彼女たち自身の子育ての場面に連鎖していく。よくいわれる世代連鎖である。

そうした母親を心理的な面で支援するには「世代連鎖のなかで取り残された母親自身の『インナーチャイルド』にアプローチしていくことが有効です」と述べているのは、東海学院大大学院教授の長谷川博一氏(臨床心理学専攻、臨床心理士)である。(著書『たましいの誕生日―迷えるインナーチャイルドの生き直しに寄り添う』一九九九・日本評論社)

インナーチャイルドとは、「内なる子ども」と訳され、子ども時代の記憶、心情、感傷など、主として情緒面を指す言葉として用いられる。子ども時代を充分な愛情を与えられず、発達段階における当然の欲求が満たされない場合、そのわだかまりが傷つきとなって、その人の心に残り続ける。それは意識されないまま心の奥底に押し込まれて、大人になって多くの影響を与えるといわれている。

長谷川博一氏は、虐待の世代連鎖を断ち切ろうと様々な活動されている方で、今起きている困難な子育て状況を変えていくには、まず、虐待的環境で育った親の支援が最優先である、との考え方を持たれているようである。ここにも子育て支援は親支援という視点を見ることができて心強い。

また、現代の子育て事情を考えると、どうしても視野に入れておかなければならないのは、脳に原因があるとされる障害や精神病理を持つ大人や子どもが、増えてきているという現状である。相談ではそうした内容を窺わせるものも珍しくなく、相談員には医療や福祉の領域に関する知識や理解が、否応なく求められるようになってきた。

なかでも、発達障害という概念で捉えられる人たちが、子どものみな

らず大人にもかなり見受けられるというところに、注目する必要があると考えている。

発達障害として、自閉症、アスペルガー、ADHD、または広汎性発達障害などの診断名があるが、それらの特徴を複合的に持つ人も珍しくないようだ。その故か、最近では発達障害の捉え方もかなり変化（或いは進化というべきか）してきて、症状の出かたは環境による二次障害と見られることもあり、「ここからが障害」とは決めにくいという考え方が有力になりつつある。診断名も医者によって全く異なったものになることもあり、専門医でもその判断は難しいといわれる。

とはいえ、診断名が付こうが付くまいが日常生活の困難という点では、子育て中の母親のストレスは相当なものとなる。ただただ困りごとばかりを次々と起こすやっかいな子どもを相手にしていると、苛立ちばかりが募ってくる。その感情を子どもにぶつける日常が、虐待につながっていくこともあるのだ。

更に事態を複雑にするのは、こうした子どもを持つ親たちが同様の傾向を持つ場合がしばしば見られることである。相談してくる母親の話のうち、ん？と違和を感じる独特の考え方や解釈、感情や気持ちなどがほとんど感じ取れない話し方など、奇異に思われるケースにぶつかる。それでも手がかりを探しながら、少しずつやり取りしていくうちに、親自身が発達障害の診断をされていたり、現在子どもと通院中だったりする事実が分かってきたりする。発達障害は遺伝の要素があるといわれているが、子どもの背景にある家族をも、できるだけ視野に入れていかなければならないと思う。

このような事態が現在の社会ではジワジワと広がっていることを、相談の場は日々感じさせてくれる。相談員はそうした社会認識に立って、きめ細かく相談者の悩みに応じていく必要がある。

例えば、その子の扱いづらさが発達障害によるものと認識していない

親には、無理なくそこに気づけるように示唆していく。また、そうと分かかってはいても、支援の手につながる術を知らない親には適切な情報提供をするなど、個々のケース、状況に即した対応が相談員に求められるものである。

相談の場は、ストレスに満ちた胸のうちを吐き出せる場であると同時に、必要に応じて具体的、現実的な示唆、支援をすることを軽んじるわけにはいかない。どうしていいか分からない苦しさから、抜け出す出口は案外、具体的、現実的な手がかりのなかにあったりもするからである。そういう意味で母親を心理的に支援するのがメインの子育て支援の相談であつても、実学的なところを大切にしていかなければ、相談者のニーズには応えられないことを身に沁みて実感している。

(三) 電話相談の有用性

前のところで触れたように、自分が子どもより優先するという価値観で動く社会のせい、近年虐待を含む不適切な養育、育ち切らない母性、子育ての次の生活態度など、世間が眉をひそめる母親の姿は、そう珍しいものとはいえなくなった。子育てに悩む母親の言い分は、子育て支援に携わるものにとつても、得手勝手でわがままなものと感じられるものが少なからずある。

(一)のところで紹介した大日向雅美氏の著書にも、子育て広場《あい・ぼーと》を利用して母親たちの自分本位で首を傾げたくなるような要求や態度に、どう対応するか苦慮する場面が書かれていた。《あい・ぼーと》ではそれをも踏まえて、徹底して母親の側に立つ方針をスタッフ間で決められたというが、相当の話し合いが持たれたと率直に述べられている。

一般的には、母親の大部分は「あなた、お母さんでしょ!」「母親なら

当然でしょ！」という、周囲の空気に相当大きなプレッシャーを感じながら暮らしている。《あい・ぼーと》のようにそこまで踏み込んで母親の思いを受け取り、支援しようという機関は少ない。そうしたなかで母親は自分の本音や欲求を抑え込み、胸にもやもやを膨らませていくことになる。

そんな母親たちにとって、匿名性が担保され、姿形が見えない電話相談は、かなり安心感を持って本音を話せる場所として、受け止められているように思う。どこの誰とも特定されない電話相談の特質が、生の気持ち語り易くするのだろう。

電話相談というものの性格は、丁度デジタルとアナログの間をいくところに、位置しているような気がする。顔と顔を合わせる面接は言葉で語られる内容だけでなく、その人全体の印象も相談者理解の重要な要素になる。が、声だけのかかわりである電話相談は、相手を理解するのに言葉からの情報以外には声の調子だけが頼りである。語られる言葉そのものに反応せざるを得ず、そのために相談員を翻弄するような作り話や、イタズラ電話に振り回されることもある。最も困りものは、一方的な快楽の相手をさせられてしまうセックス電話である。これらのものは、今までのいわゆるアナログの社会では見られないものだ。パソコンメールなどに殺到する迷惑情報に準ずるものだろうが、この辺りがデジタル社会の現象といえるように思う。

ただ、私が携わっている子育て支援と銘打った電話相談には、そうしたものはほとんど見受けられない。セックス電話に関しては、ほぼ無いに等しい。そのことから子育て支援をコンセプトとする相談が、電話をツールとしてなされるのは、相談者の状況に符号したものであると考えている。

電話を介しての相談が、言葉からの情報以外は声の調子だけが頼りというものの、メールなどの画面上のやり取りだけでは、決して伝わら

ないニュアンスを感じ取ることはできる。関係性を作る上で必要な手応えを相談者、相談員ともに生で感じ取ることもできる。それはIT機器を使ったコミュニケーションとは違う、実態を伴った関係性であり、それ故に相談者に満たされ感をもたらすものともなる。その満たされた気持ちは、面接のカウンセリングで得られるものと、質的には何ら変わるものではないと思うのだ。

実をいえば、この電話相談に携わるまでは、私は心理相談とかカウンセリングというものを、精神的なアプローチが正統であると考えてきた。カウンセラーは面接を重ねて、クライアントの現在の生き難さの根底にあるものを、クライアント自身が気づいて生き直す方向を見つけ出す、そこに寄り添い援助する存在と字び、そう思ってきた。

私がこの世界に関心を持ったのは、直接的には前述したように我が子の問題に悩んだからなのだが、もともと人間丸ごとには大いなる興味を持っていたからでもある。「人間が好き」と言った方が、分かり易いかもしれない。子どもとの葛藤はそのきっかけで、むしろ私のなかにずっと潜在していたその思いが、私をここまで人にかかわるこの世界にのめりこませたのだと、今はそう考えている。

なかでも最も勉強しなかったのが精神分析であった。人間!!。この不可解なるもの（自分自身を含めて）を分かりたいという願望は、いつもいつも私の心の内に巣くっていた。

精神分析は、その私の思いに伝えてくれる理論として、私には憧れの分野だったのである。そして精神分析的カウンセリングは、面接が前提であるのはいうまでもないことで、私もそこを目指していた筈であった。

あるカウンセリングの講座で、著名な年配の講師に、電話相談の相談員としての立場から質問したことがあった。私はその頃、電話相談に携わって数年が経っており、その意味を認識しつつあった時期で、どんな答えが返ってくるか、期待していたと思う。が、その講師は「私は電話

相談については、全く分からないので答えられません」と明快に言われたものである。オーソドックスなカウンセリングをされてきた人には、電話相談は悪く言えば邪道なもので、セラピーとはいえないものなのかもしれない。その効果についても、全く見当もつかない思いであつたろう。

何を質問したか今は忘れてしまったが、はっきり「分からない」と言われたのが、私にはかなりショックだった。といって不愉快だった訳ではない。むしろ爽快にすら感じる反応だったといえる。

しかし、徐々に電話相談の意味を感じ始めていた私には、何回も面接を重ねる従来のカウンセリングは、一般の人すべてに開かれた相談の場には、なかなか得ないように思われる。それを受けるには、時間的にも経済的にも、或る程度余裕ある生活でなければ、不可能といっているのではないだろうか。

特に子育てに困難な状況が生じている母親たちは、日々の生活に追われて、到底カウンセリングなどに割く時間は見出せない。経済的な余裕もなく、周囲もカウンセリングを受けるなどということに無理解であったりすれば、ハードルはとてつもなく高いものとなる。それを受けられる人たちは、とくに子育てに目一杯の母親たちの場合、ほんの一握りの、或る意味で恵まれた人たちといえるだろう。

そうした現状認識をしていた私にとって、十年余り電話で相談を受け続けてきた経験が、子育てに悩む多くの母親たちに電話というツールは思ったより有効なのだと、気づかせてくれたことは何よりの有難い収穫であった。電話の声だけで、何ほどのことができるのだろうかという思いも、大方のカウンセリングに関わる人たちにはあると思う。最初の頃は、私もそう思っていた。が、そんなものではないと、相談者が私に教えてくれたのだ。

何度も何度もかけ続けてきている相談者のなかには、同じような内容

の訴えを繰り返しているうちに、何かを乗り越える瞬間に辿り着くことがある。その瞬間を共有したという手応えを感じたとき、相談員の胸の内に湧き上がる思いを表す言葉を私は探せない。

十年余も続く電話相談であるせいか、リピーターも多く、何人かの人からは「電話相談のおかげでなんとかやってきました」という言葉も聞かれる。その言葉を聞くと、相談者にとって電話機は単なる日常生活の通信機器ではなく、そばにいて困ったときにすぐに手を差し伸べてもらえる隣人、といってもいいのではないかとすら思えるのである。勿論、受話器を取ればその向こうに、無条件に自分に寄り添ってくれる人がいる、というのが絶対条件であるが・・・。

現在の社会状況において、セラピーと考えるには限界がありながら、この絶対条件を満たす電話相談であるならば、その存在する意味は大きいといえるのではないだろうか。

そのためにも、相談員の有り様の質を、魂のレベルで上げていかなければならない。

「・・・(電話相談は)・・・相手の表情などが見えない分、その言葉や口調は、相手を突き刺す刃にもなる。電話相談に求められる専門性を侮ってはならない」

これは(二)で紹介した臨床心理士、長谷川博一氏が虐待の電話相談に関して述べられた言葉である。声だけのやり取りでは、一層注意深く言葉の使い方、感情的にならない声の調子など、心する必要があるだろう。「電話相談に求められる専門性を侮ってはならない」ことは、そこに従事する相談員全員が深く認識しなければならぬ。

追記

私が携わっている電話相談にかけてくるのは、ほとんど母親なので、文章中母親という言い方が多くなった。が、これは子育ては母親がする

もの、という限定的な意味ばかりで使用していない。多くの場合、子育て中、他のものが入る余地がないほど、子どもの身近に存在するもの、いわゆる母なるものを意味している。母なるものには実際の母親ばかりでなく、父親、祖父母、その他誰でも、なることができる。その子を愛する大人で、その子に受け容れられれば、という但し書きはつけなければならぬが・・・。

そのように理解して読んでいただければ、と思う。